

音楽的視点から捉える保育現場の環境構成

—保育者への聞きとり調査をふまえて—

岡 林 典 子

(初等教育学科准教授)

丹 羽 ひ と み

(非常勤講師)

村 田 睦 美

(非常勤講師)

1. はじめに

幼稚園教育は、平成20年度幼稚園教育要領の改訂においても、これまでの考え方が引き継がれ、「環境を通して行うものであること」が基本とされている。そこでは教師が「幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるもの」として、計画的に適切な環境を構成する役割を求められている¹⁾。また同様に平成20年度改訂の保育所保育指針においても、保育士は計画的に環境を構成し、工夫して保育することを求められている²⁾。子どもをとりまく保育環境には、施設や遊具、遊びや活動の場などの物的・空間的な環境や、保育者や友達などの人間関係を含む人的環境、また自然環境などが挙げられるが、保育現場の環境構成を担う保育者はどのような意識を持って環境を捉え、それを構成し、保育にいかしているのだろうか。

小山(2004)は、現場の保育者と養成段階にある学生の保育環境に対する認識には、重要だと捉える環境内容に相違があると指摘している³⁾。

また、長年保育者養成とリカレント教育に関わっている嶋田(2009)は、養成校でかなりの演奏技能を習得していても、保育現場で子どもの歌の表現を活かすことのできないピアノ伴奏がなされていることを指摘し⁴⁾、人的環境である保育者の基礎的技能であるピアノ演奏について、養成校での指導のあり方に疑問を投げかけている。

さらに、近年は保育現場のよりよい音環境についても検討がなされつつあり⁵⁾、保育者自身が子どもの周りの音に対して、自覚的で意図的であることが、音環境をいかした保育実践へつ

ながることが指摘されている⁶⁾。

そのような背景をふまえて、保育者養成に携わり、音楽関連の科目を担当している執筆者らは、保育者を目指す学生がピアノ技能や歌唱技能を身につけるだけでなく、将来保育現場の音楽的な環境構成を担うことを見据えて、幅広い視点から音楽的な環境を捉え、子どもの音楽的な感性の育ちを援助できるような人材養成に向けて、授業内容を検討し指導を行っている。

ところで、保育の現場で保育者は、物的環境や人的環境のどのようなことに意識を向け、何を大切だと考えて、環境を構成しているのだろうか。また、そうした意識や考えをもとに、どのような保育内容が工夫されているのだろうか。

本稿では、保育者への聞きとり調査を行い、保育現場における音楽的環境に対する保育者の意識や配慮について明らかにする。また、短大初等教育学科で保育者を目指して学んでいる学生にも聞きとり調査を行い、保育現場における音楽的環境に対する学生の意識を明らかにする。それらを比較検討し、今後の指導において重視すべき点を見出し、授業内容や指導のあり方を考えるための一助としたい。

2. 研究方法

- ①調査対象：高槻市公立幼稚園、宝塚市公立幼稚園、京都市私立幼稚園、摂津市私立幼稚園、川西市私立幼稚園の教諭、京都市私立保育園の保育士 計54名／本学短期大学部初等教育学科1回生 62名；2回生 34名
- ②調査期間：2009年7～8月
- ③調査手続き：質問紙法を用い、上記の6つの

園へは郵送にて園長へ調査用紙を送り、担任へ配布してもらった。回収は園ごとに郵送にて行った。また学生には、2009年度前期の音楽関連科目の最終回講義終了時に調査用紙の配布を行い、記入後その場で回収した。調査用紙には、以下の4つの質問を設定した。(学生には質問3について調査した。)

- (質問1) 子どもたちの豊かな感性を育むために、保育の場における音楽的環境として意識されていることはありますか。(はい/いいえ)
- (質問2) 「はい」と答えられた方は、意識されている事柄を具体的にご記入ください。
- (質問3) 子ども感性を育むための音楽的環境として、どのようなことが大切だと思われますか。以下の項目に関して、該当する数字を解答欄にご記入ください。〔全27項目(詳細は文末にアンケート用紙を添付する)について5段階の評定尺度法で記入する。(5:とても大切だと思う, 4:大切だと思う, 3:どちらでもない, 2:大切だとは思わない, 1:全く大切だとは思わない)〕
- (質問4) 子ども感性をはぐくむ音楽的環境について考えておられることがあれば、自由

に書いてください。

- ⑤結果の分析方法: 質問2および質問4についての自由記述は、記述された内容によって、物的・空間的環境、人的環境、保育内容に分類し、表にまとめた。質問3は、項目ごとに保育者全員の平均と標準偏差に求め、さらに園別の平均と標準偏差も求めた。また学生全員の平均と標準偏差および学年別の平均と標準偏差も求めた。

3. 結果と分析

(1) 音楽的な環境構成に関する保育者の意識について

質問1「子どもたちの豊かな感性を育むために、保育の場における音楽的環境として意識されていることはありますか」に対して、「はい」という回答は54名中48名、「いいえ」という回答は5名であった。5名の内訳は、0~2歳児の担任が4名、4歳児の担任が1名であった。

質問1で「はい」と答えた保育者が、保育の場における音楽的な環境構成に関して具体的にどのようなことを意識しているかについて、自由記述の内容を表1にまとめた。

表1 保育の場における音楽的な環境構成として、保育者が意識していること

物的・空間的環境に関して
1) 保育室前の廊下に電子ピアノを配置し、自由あそびの時間等でいつでも子どもたちが触れて遊べるようにしている。(3年)
2) ピアノを自由に使える場所に片付けている。(6年)
3) 子どもたち自身が進んでかかわれるように環境(場・カセットデッキ、カセットテープ)を整える。(34年・主任)
4) 音響設備の充実、楽器等の整備、CD、DVD等の整備・管理(インデックス作製)。(27年、園長)
5) 保育に応じては、BGMをかける(6年)
6) 雨の音やセミの鳴き声など自然の音を聞く時間を一日一度は設けています。(7年)
7) 静かになる時間を設ける。(2年、6年)
人的環境に関して
《保育者が自身に対して意識していること》
8) 自分の話し方や話し声も状況によって変えるようにしています。(7年)
9) 色々な活動場面に応じて、歌や手あそびを利用したり、声の大きさや声色を意識して保育しています。ひきつけられる手段にもなるかと思えます。(10年)
10) 色々な歌、手あそびができる様、資料など参考にしながら子どもにおろしている(18年)
11) 保育士が正しい音で歌う(4年)
12) 保育者自身が、楽しそうにうたったり、楽器を演奏したりする姿を見せて、良い刺激となるようにする。子どもがうたったり、演奏したりする場面では、「すごいね。」とか「すてきだね。」などと、認め、自信がもてるようにする。(7年半)
13) まだはっきりうたえない0.1歳児の子でも音に触れられるように季節のうた等、保育士がゆっくうたうようにしています。(4年)
14) 活動の中で、保育者がピアノを弾き、「この曲が終わるまでに、〇〇をしましょう」等と呼びかける等、園児が、自然と音楽に触れる機会を増やしています。(4年)

発達教育学部紀要

<p>《役職者から担任への助言》</p> <p>15) 保育者が指導している歌や合奏等の表現の仕方を担任及び担当にアドバイスしている。(39年・主任)</p> <p>16) 音楽的環境として、一番大切にしたいのは、保育者自身が環境であるという意識。一日の大半が保育者の声を感じての生活である。ささやくように・はさむように・はじけるように・リズムカルに・流れるように・時には荒だてて・悲しげに と人の心に直結する要素が全て含まれているのが、保育者の話すという行為にある。保育者の語りかけには、注意をはらっている。(31年・園長)</p>
<p>保育内容に関して</p>
<p>《歌う》</p> <p>17) 毎日歌をうたう。(4年、5年、6年、22年)</p> <p>18) 季節のうたをうたう。(4年、5年、6年、22年)</p> <p>19) 朝、昼、降園時は、保育者がピアノを弾き、クラス全員で歌うことを日課としています。活動の合間、合間に、手遊びや歌遊びを取り入れ、注意を引きつけたり、集中力を養う機会を作っています。また、ある音楽を聞かせて、そこから何が想像できるかを話合ったり、例えば、「雨の音ってどんな音？」と問いかける等、しています。(4年)</p> <p>20) 誕生会等の機会に誕生児の保護者が園児の前に立ち、童謡や文部省唱歌(分かりやすい歌詞とメロディーで親しみやすい)を披露し、親子で共に歌えるひとときをもつようにしている。親にとっても子にとっても心地良い時間である。(29年・園長)</p> <p>21) 遊びの中でロズさんだり、親しんでいけるような歌をとり上げていく。(童謡・わらべうた・手あそびうたなど)(34年・主任)</p> <p>22) 0,1歳の小さい子供達相手なので、日常の歌や手あそび等大きな声と一緒に歌い、手あそびも楽しめるようにと思っています。(14年)</p> <p>《楽器に親しむ》</p> <p>23) いろいろな国の楽器を使って遊んだりしている。ひょうたんに貝がらがついているもの、マラカス、でんでん太鼓風なもの。(27年)</p> <p>24) 楽器に親しむ。いろいろな楽器の音を聴く。(3年、4年、22年)</p> <p>25) ハーモニカを吹く。和太鼓をたたく。(22年)</p> <p>《聴く》</p> <p>26) 子どもたち自身が知っている曲だけでなく、教師が保育の中で弾いている曲なども耳で聞いて、音あてゲームをしたり、真似して弾いてみたりと、子どもたち同士で楽しんでいます。(3年)。</p> <p>27) ピアノを聞いて、体を動かすなど。(4年)</p> <p>28) 楽器の音だけでなく、自然の中から聞こえる音(雨の音、風の音など)に耳を傾けること。またその音を自分の知っているものにたとえたりする。あえて小さな音(すずなど)が聞こえる物を用い、耳をすまし、音を意識できるようにしている。(3年)</p> <p>29) 身近な(生活を送る中で)、物事や事象における音、自然界から受ける音も、感じ取れる様に、意識して取り組んでいる。</p> <p>30) 日常から様々な音に耳を傾けたり、そこからイメージを膨らませたものになって遊んだりする機会をもつ。幼児の発達に合わせて、自分で音を作る楽しさを味わったり、楽器を使って感じたことをリズムにして表現したりする楽しさへとつなげていくことができると考え、意欲的に保育計画に位置づけている。(24年)</p> <p>《動く》</p> <p>31) リズムにあわせて楽しく体を動かせるようなリトミックを取り入れる。(4年、5年、6年、22年)</p> <p>32) リトミックなどを通して、体全体で音を楽しんだり、表現することを保育の中でも取り入れていきます。また、竹太鼓などを通して、様々なリズムを経験し、個人個人の感性を豊かにすると共に、皆で音を1つにすることによって、その感性を刺激し、さらに豊かな感性を育んでくれたらと思っています。(8年)</p> <p>33) 全身を使ってのリズム活動や、体や、物、自然の音を楽しむ時間を持つようにしています。(3年)</p> <p>34) 時には音楽をかけて、ダンスやそうじをしています。(3年)</p> <p>35) 幼児が興味、関心をもって、見たり触れたりしたものになって身体表現をする遊びをタイミング良く取り入れていく。その際、幼児の表現意欲が高まるような音や曲などを、動きのテンポに合わせてもちいることで、感じたことを表現する楽しさにつながると考えている。</p> <p>《その他》</p> <p>36) 身近な言葉や友達の名前を使ってリズムあそびをする。(4年)</p> <p>37) うた、楽器の指導だけでなく、普段の遊びの中での音(トントン、ピョンピョン)などの音で遊んだり、時々、外から聞こえてくる音、みんなで聞いてみたり、身近な音を聞いたり、表現することを心掛けています。(3年)</p> <p>38) 出来るだけ、歌ってあげたいと思っています。また、音の出るおもちゃを用いたりします。(8年)</p>
<p>子どもの心情に関して</p>
<p>39) 音楽って楽しいなと感じられること。(7年半)</p> <p>40) 子ども達に、本当にきれいな音、美しい物になるべく多くふれてもらいたいと思っています。(6年・園長)</p>

※ 表中の箇条書きの内容は、回答の表現のままである。また、()内は経験年数である。

※ 役職者(主任、園長)の回答には役職名を記入した。

表1-1, 2, 3, 4より、保育者は子どもたちが進んでかかわれるように楽器を配置したり、整えたりなどして物的環境に配慮していることが捉えられる。また表1-6, 7からは、子どもが自然の音に耳を傾けられるように、静かな場や時間を設定するなど空間的環境を整えていることが伺える。

さらに、人的環境として自身を意識し、話し方や声の大きさ、言葉かけや歌いかけのテンポなどに注意を払ったり、音楽するモデルとして、楽しそうに歌ったり、演奏する姿をみせるなどの行為を示していることが読みとれる(表1-8, 9, 12, 13, 16)。また、歌う、楽器に親

しむなどの保育内容に加えて、さまざまな音や音楽への気づきを促すような取り組みや、見る、触れるなどの五感を通してリズムや動きに意識を向ける工夫、配慮がなされていることがみてとれる(表1-17~25, 26~30, 31~35)。

(2) 保育者が重視する環境の項目について

表2, 4, 6は保育者が音楽的な環境構成を行うにあたって、何をより重視しているのかについて、質問3の結果を全体平均の点数が高いものから順に並べたものである。表3, 5, 7は学生の調査結果である。表内の()は標準偏差である。

表2 物的・空間的環境についての項目順位—保育者の回答から—

順位	【物的・空間的環境】	全体平均	A園	B園	C園	D園	E園	F園
1位	異年齢の子どもの交流の場の確保	4.44 (0.63)	4.14 (0.69)	4.78 (0.44)	4.4 (0.89)	4.58 (0.51)	4.50 (0.58)	4.29 (0.69)
2位	保育における静かな時間の確保	4.31 (0.72)	4.86 (0.38)	5.00 (0.00)	4.6 (0.55)	4.08 (0.51)	4.25 (0.50)	3.82 (0.81)
3位	子どもの動きや活動を促すための音楽の活用	4.31 (0.58)	4.43 (0.53)	4.11 (0.78)	4.8 (0.45)	4.50 (0.52)	4.00 (0.82)	4.18 (0.39)
4位	さまざまな自然音に気づけるような場の整備	4.22 (0.63)	4.71 (0.49)	4.67 (0.50)	4.4 (0.45)	4.0 (0.60)	4.00 (0.82)	4.00 (0.61)
5位	生活の中の身近な素材の音に気づけるような場の整備	4.11 (0.69)	4.71 (0.49)	4.56 (0.73)	4.0 (0.00)	4.08 (0.51)	4.00 (0.82)	3.71 (0.69)
6位	園における静かな場の整備	4.09 (0.76)	4.71 (0.49)	4.67 (0.50)	4.2 (0.45)	3.92 (0.79)	4.25 (0.50)	3.59 (0.71)
7位	さまざまな楽器の整備	4.07 (0.64)	4.28 (0.76)	4.22 (0.44)	4.2 (0.45)	4.33 (0.49)	4.00 (0.00)	3.71 (0.77)
8位	さまざまな音を身近で感じられるような楽器・音具コーナーの設置	3.87 (0.65)	4.00 (0.58)	4.00 (0.71)	4.2 (0.45)	4.0 (0.43)	4.25 (0.50)	3.47 (0.72)
9位	さまざまな音楽を身近で感じられるようなCDプレーヤーの設置	3.83 (0.72)	4.14 (0.69)	3.56 (0.73)	3.4 (0.55)	4.25 (0.45)	4.00 (0.82)	3.65 (0.79)

※枠内の数字は上が平均値、下の()が標準偏差値である。

表2より、物的・空間的環境に関して保育者全体の平均値が高かった項目は「異年齢の子どもの交流の場の確保(1位:4.44)」、「保育における静かな時間の確保(2位:4.31)」、「子どもの動きや活動を促すための音楽の活用(2位同点:4.31)」、「さまざまな自然音に気づけるような場の整備(4位:4.22)」などであった。一方、平均値が低かった項目は「さまざまな音楽を身近で感じられるようなCDプレーヤーの設置(最下位:3.83)」、「さまざまな音を身近で感じられるような楽器・音具コーナーの設置(8位:3.87)」、「さまざまな楽器の整備(7

位:4.07)」などの項目であった。園ごとに若干の違いは生じているが、上記の結果をみると、保育者はCDから流れる楽曲や楽器音などよりも、異年齢の子どもの交流を可能にする場や、静けさや自然音を感じとれる場を確保することを重視して環境構成を心がけていることが伺える。しかし、前項で示した自由記述の中には、子どもたちが進んでかかわれるように楽器を配置したり、整えたりなどして物的環境にも配慮していることが伺える記述もあった。子どもたちが興味や関心をもって関わられるさまざまな楽器や音を出す素材が身近にあることは、子ども

表3 物的・空間的環境についての項目順位—学生の回答から—

順位	【物的・空間的環境】	全体平均	1年生	2年生
1位	異年齢の子どもたちの交流の場の確保	4.65 (0.63)	4.58 (0.59)	4.76 (0.47)
2位	子どもの動きや活動を促すための音楽の活用	4.57 (0.58)	4.56 (0.82)	4.62 (0.47)
3位	さまざまな自然音に気づけるような場の整備	4.50 (0.63)	4.53 (0.65)	4.47 (0.69)
4位	さまざまな楽器の整備	4.46 (0.64)	4.44 (0.62)	4.53 (0.52)
4位	生活の中の身近な素材の音に気づけるような場の整備	4.46 (0.69)	4.52 (0.87)	4.32 (0.75)
6位	保育における静かな時間の確保	4.29 (0.76)	4.32 (0.65)	4.26 (0.50)
7位	さまざまな音を身近で感じられるような楽器・音具コーナーの設置	4.20 (0.65)	4.16 (0.81)	4.24 (0.77)
8位	園における静かな場の整備	4.10 (0.72)	4.06 (0.74)	4.12 (0.67)
9位	さまざまな音楽を身近で感じられるようなCDプレーヤーの設置	3.87 (0.72)	3.71 (0.93)	4.21 (0.65)

※枠内の数字は上が平均値、下の（ ）が標準偏差値である。

が音や音楽に出会うための大切な要素であり、そこに意識を向けて配慮することも音楽的な環境構成において必要なことである。

一方、学生の結果を示した表3では、「保育における静かな時間の確保（6位：4.29）」、「静かな場の整備（8位：4.10）」など保育の場の「静けさ」に関わる項目が、保育者に比べて下位に位置づけられていることが特徴として読み

とれる。保育の場の静けさは、子どもの音への気づきを導いたり、五感をとおして環境を捉えることへと通じる注目されるべき項目であると考えるが、聞きとり調査からは、保育の場の静けさに対する学生の意識はあまり高くないことが明らかになった。その他の項目については、学年によって若干の順位差はあるが、ほぼ保育者と同様の位置づけであった。

表4 人的環境についての項目順位—保育者の回答から—

順位	【人的環境】	全体平均	A園	B園	C園	D園	E園	F園
1位	保育者のタイミングのよい言葉かけ	4.44 (0.60)	4.57 (0.53)	4.78 (0.67)	4.80 (0.45)	4.58 (0.51)	4.00 (0.00)	4.12 (0.60)
2位	保育者自身の表現力	4.39 (0.63)	4.57 (0.53)	4.44 (0.53)	4.40 (0.89)	4.67 (0.49)	4.25 (0.50)	4.12 (0.70)
3位	保育者自身の発する声の大きさや音色	4.35 (0.68)	4.57 (0.53)	4.89 (0.33)	4.60 (0.55)	4.42 (0.51)	3.75 (1.26)	4.00 (0.61)
3位	友達や保育者の発する声を感じとれるような保育者の働きかけ	4.35 (0.59)	4.71 (0.49)	4.67 (0.50)	4.40 (0.55)	4.42 (0.51)	4.25 (0.50)	4.00 (0.61)
5位	さまざまな自然音に気づけるような保育者の働きかけ	4.30 (0.66)	4.57 (0.53)	4.89 (0.33)	4.0 (0.71)	4.25 (0.75)	4.00 (0.82)	4.06 (0.56)
5位	子どもが自分自身の発する声を感じとれるような保育者の働きかけ	4.30 (0.63)	4.71 (0.49)	4.67 (0.50)	4.40 (0.55)	4.33 (0.49)	4.00 (0.82)	3.94 (0.66)
7位	生活の中の身近な素材の音に気づけるような保育者の働きかけ	4.24 (0.64)	4.71 (0.49)	4.78 (0.44)	3.80 (0.45)	4.25 (0.62)	4.00 (0.82)	3.94 (0.56)
8位	保育者のリズムカルな言葉かけ	4.13 (0.73)	4.43 (0.79)	4.00 (0.87)	4.00 (0.55)	4.25 (0.62)	4.00 (0.00)	3.88 (0.78)
9位	保育者自身のピアノ演奏技能	4.09 (0.64)	4.14 (0.69)	4.11 (0.33)	4.60 (0.55)	4.58 (0.51)	3.25 (0.96)	3.76 (0.66)
10位	保育者自身の歌唱技能	4.02 (0.69)	4.14 (0.69)	3.89 (0.78)	4.40 (0.55)	4.50 (0.52)	3.50 (1.00)	3.71 (0.47)

※枠内の数字は上が平均値、下の（ ）が標準偏差値である。

次に、人的環境についてであるが、保育者が高い平均値を示した項目は、表4より「保育者のタイミングのよい言葉かけ（1位：4.44）」、「保育者自身の表現力（2位：4.39）」、「保育者自身の発する声の大きさや音色（3位：4.35）」、「友達や保育者の発する声を感じとれるような保育者の働きかけ（3位同点：4.35）」などであった。

一方、平均値が低かった項目は「保育者自身の歌唱技能（最下位：4.02）」、「保育者自身のピアノ演奏技能（9位：4.09）」、「保育者のリズムミカルな言葉かけ（8位：4.13）」などの項目であった。「歌唱技能」「ピアノ技能」は下位に位置づけられてはいるが、どちらも評定4の（大切だと思う）を超えており、保育者がこの項目を重視していないという訳ではないことが理解できる。また、これらの項目の平均値は6園中4園で最低得点を示しているが、園ごとに若干の違いがあり、C園、D園ではピアノ技能が2位、歌唱技能が4位と上位に位置づけられている。園による意識の差は保育のあり方と切り離せないものであり、保育者の鍵盤楽器の演奏技能や歌唱力を必須のものとするのかどうか

という問題⁷⁾をはらんでいるが、今回の調査結果はピアノを弾くことや歌うことなどの技能よりも、言葉かけのタイミングや保育者自身の表現力、声の大きさや音色、および友達や保育者の発する声を感じとれるような保育者の働きかけなど、保育者と子ども、あるいは子ども同士の関わりやつながりの中に音楽的な環境構成の大切な要素を捉えている保育者が多いということを示唆していよう。

次に表4と表5を比較すると、保育者と学生が挙げた項目の順位がほぼ同様であることが捉えられるが、一点だけ、保育者が3位に位置づけた「友達や保育者の発する声を感じとれるような保育者の働きかけ」という項目が、学生には8位と低く捉えられていることが、特徴的である。

次に、「保育内容」についてであるが、表6より保育者全体の平均値が高い項目は、「さまざまな歌を歌う活動（1位：4.56）」、「さまざまな楽器であそぶ活動（2位：4.31）」、「自然の中のさまざまな音にふれられる活動（3位：4.30）」、「身の回りのさまざまな音に耳を傾ける活動（4位：4.28）」などであった。

表5 人的環境についての項目順位 —学生の回答から—

順位	【人的環境】	全体平均	1回生	2回生
1位	保育者のタイミングのよい言葉かけ	4.67 (0.60)	4.61 (0.55)	4.76 (0.47)
2位	保育者自身の表現力	4.60 (0.63)	4.58 (0.53)	4.65 (0.65)
3位	保育者自身の発する声の大きさや音色	4.55 (0.68)	4.52 (0.59)	4.62 (0.50)
4位	保育者のリズムミカルな言葉かけ	4.48 (0.73)	4.47 (0.65)	4.47 (0.69)
5位	さまざまな自然音に気づけるような保育者の働きかけ	4.44 (0.66)	4.49 (0.60)	4.35 (0.79)
5位	子どもが自分自身の発する声を感じとれるような保育者の働きかけ	4.44 (0.63)	4.51 (0.67)	4.35 (0.52)
5位	生活の中の身近な素材の音に気づけるような保育者の働きかけ	4.44 (0.64)	4.46 (0.59)	4.41 (0.79)
8位	友達や保育者の発する声を感じとれるような保育者の働きかけ	4.35 (0.59)	4.36 (0.68)	4.44 (0.67)
9位	保育者自身のピアノ演奏技能	4.26 (0.64)	4.23 (0.66)	4.32 (0.75)
10位	保育者自身の歌唱技能	4.19 (0.69)	4.15 (0.70)	4.29 (0.79)

※枠内の数字は上が平均値、下の（ ）が標準偏差値である。

表6 保育内容についての項目順位—保育者の回答から—

順位	【保育内容】	全体平均	A園	B園	C園	D園	E園	F園
1位	さまざまな歌を歌う活動	4.56 (0.57)	4.57 (0.53)	4.22 (0.67)	5.00 (0.00)	5.00 (0.00)	4.25 (0.50)	4.35 (0.61)
2位	さまざまな楽器であそぶ活動	4.31 (0.61)	4.29 (0.76)	4.33 (0.50)	4.80 (0.45)	4.58 (0.51)	3.75 (0.50)	4.12 (0.60)
3位	自然の中のさまざまな音にふれられる活動	4.30 (0.63)	4.71 (0.49)	5.00 (0.00)	4.00 (0.00)	4.08 (0.67)	3.75 (0.96)	4.12 (0.49)
4位	身の回りのさまざまな音に耳を傾ける活動	4.28 (0.66)	4.71 (0.49)	5.00 (0.00)	4.00 (0.71)	4.00 (0.60)	4.00 (0.82)	4.06 (0.56)
5位	行事（生活発表会、お誕生会、クリスマス会など）における音楽の活用	4.24 (0.55)	4.43 (0.53)	3.78 (0.48)	4.60 (0.55)	4.50 (0.52)	3.75 (0.50)	4.24 (0.44)
6位	さまざまな音楽を聴く活動	4.15 (0.56)	4.43 (0.53)	4.22 (0.67)	4.20 (0.45)	4.40 (0.51)	3.50 (0.58)	3.94 (0.43)
7位	身近な素材を用いた手作り楽器や音具を作って遊ぶ活動	4.09 (0.62)	4.57 (0.79)	4.44 (0.53)	3.80 (0.45)	4.00 (0.43)	3.50 (0.58)	4.00 (0.61)
8位	芸術や文化としての音や音楽にふれられる活動	4.02 (0.60)	4.29 (0.76)	3.89 (0.60)	4.40 (0.55)	4.08 (0.51)	3.50 (0.58)	3.94 (0.56)

※枠内の数字は上が平均値、下の（ ）が標準偏差値である。

表7 保育内容についての項目順位—学生の回答から—

順位	【保育内容】	全体平均	1回生	2回生
1位	行事（生活発表会、お誕生会、クリスマス会など）における音楽の活用	4.62 (0.55)	4.66 (0.51)	4.56 (0.47)
2位	さまざまな歌を歌う活動	4.61 (0.57)	4.53 (0.56)	4.47 (0.50)
3位	自然の中のさまざまな音にふれられる活動	4.59 (0.63)	4.68 (0.50)	4.41 (0.67)
4位	身の回りのさまざまな音に耳を傾ける活動	4.57 (0.66)	4.63 (0.52)	4.47 (0.50)
5位	さまざまな楽器であそぶ活動	4.48 (0.61)	4.53 (0.56)	4.38 (0.50)
6位	身近な素材を用いた手作り楽器や音具を作って遊ぶ活動	4.47 (0.62)	4.52 (0.57)	4.38 (0.67)
7位	さまざまな音楽を聴く活動	4.30 (0.56)	4.32 (0.50)	4.24 (0.81)
8位	芸術や文化としての音や音楽にふれられる活動	4.21 (0.60)	4.27 (0.68)	4.12 (0.60)

※枠内の数字は上が平均値、下の（ ）が標準偏差値である。

また、「保育者のリズムカルな言葉かけ」の項目が学生では4位に挙げられているが、これは、保育内容指導法（表現）の授業の中で保育者が日常の多様な場面で子どもたちにリズムカルな言葉かけをしている実態を取り上げて、説明したことに起因しているのかもしれない。また、保育者においてこの項目が低く位置づけられているのは、保育者がそのようなリズムカルな言葉かけを、日常の保育において無意図的に行っていることを示しているのではないだろうか。ここで平均が最高値を示した「さまざまな歌

を歌う活動」の項目では、先にピアノ技能や歌唱技能を上位に位置づけていたC園とD園においては全員一致で5点を示している。一方、B園では、「自然の中のさまざまな音にふれられる活動」と「身の回りのさまざまな音に耳を傾ける活動」の項目に、全員一致の5点の評定が示されている。またA園でも、同様の2項目が最高値を示しているが、C園、D園ではこれらの2項目が下位に位置づけられ、A園、B園との得点に差がみられる。ここにも園ごとの保育観・音楽観の違いが現れているとみなせる。

一方、平均値が低かった項目は「芸術や文化としての音や音楽にふれられる活動」、「身近な素材を用いた手作り楽器や音具を作って遊ぶ」などであるが、保育内容に関する8項目のすべてが評定4以上の高得点であることからすると、保育者はこれらの項目全体を大切にすると捉え

ていることが理解できる。

一方、表7より学生では「行事（生活発表会、お誕生会、クリスマス会）における音楽の活用（1位：4.62）」という項目の平均値が最も高く、2位からは保育者とほぼ同様に「さまざまな歌を歌う活動（2位：4.61）」、「自然の中のさま

表8 子どもの感性を育むための音楽的環境について考えていること

物的・空間的環境の構成に関して
1) 普段から楽器や音楽に触れられる時間があれば、子どもたちにとっても、もっと音楽が身近なものに感じられると思いますが、施設の広さや教員数などから、なかなか実施が難しいのが現状だと思います。限られたスペースや時間等の中で、子どもたちにもっと音楽の楽しさを伝えていけたらと思っています。(3年)
人的環境としての保育者自身に関して
2) 保育者自身の音楽的センスの向上 研修及び努力で補う。(39年・主任)
3) ピアノ等の音に合わせ、「さんはい!」で一斉に歌うことより、子どもの表情を見つつ、先生の落ち着いた声を聴きながら歌うことを大切にしたいので、一番最初に新しい歌をうたう時は、子どもとの距離を近くして、生で歌うように心がけています。(4年)
4) 教え込む音楽でなく、発見がたくさんできる音楽活動ができる環境を十分に整えていきたいと思っています。(3年)
5) 音楽に限らず、五感を大切に保育を心掛ける様、まづ先生自身の意識を高めていく必要があると思います。(先生の声が騒音になってしまう事があっては悲しいです)(30年・主任)
6) 先生が自信を持つことで、子ども達と同じ目線に立って、心から音楽リズムを楽しむことが出来、その気持が子ども達に、自然に楽しく入っていく様になってもらいたいです。(6年・園長)
7) ピアノ……ピアノ演奏のスキルは、あくまでも子どもたちの音楽活動を補うためのものである。従って、ピアニストのようにひきあげることが目的ではなく、補助的立場を逸脱しないよう注意する必要がある。ピアノについていけずアップアップして歌っているということがないよう留意したい。基本的に音楽を大切に、つまり音を楽しむことのできる環境にする必要がある。声、音、曲、そして、静けさまで感じる環境に子どもをおきたいものである。(31年・園長)
8) 27項目の質問について、判断の難しいものもありますし、その取り組みについても、年齢、人数、その年の子供の様子によっても変わっていくものだと思います。その年の組の年齢、雰囲気に合わせて音楽、表現活動が出来ればよいなと思いますし、保育士も活動しやすい技術や働きかけが必要だと思います。(14年)
9) 静・動をとらえる時に音や音楽もガンガン鳴らす時、ガンガン鳴ってくる時、静かに聞く時、静かに聞こえてくる時、静寂の中での音楽が鳴る時、音がハッと聞こえてくる時、等々、生活の中では、日々、音や音楽を子どもなりにどのようにとらえるか、とらえさせるかは、日々の保育にかかわってきますし、年齢によってもちがうと思います。その子その子が、音や音楽をとらえて、楽しむことができれば、自分なりに歌や楽器が好きになってきます。どのように促していくかは、その時その時の保育士のかかわり方によって影響は大きいと思います。(21年・主任)
10) 自然の音を大きく時に保育者が「さあ、外を見て自然の音をきいてみよう」と子どもたちに声を掛けるのと、「誰がまだお話ししてるのかなと思ったらセミさんだった!」と子どもたちに声を掛けるのでは同じ自然の音をきいてはいるが子どもたちの受け取り方が変わってきます。保育者側がどう子どもたちに声を掛けていくか、いつも意識して保育をしています。(2年)
11) 子どもの感性をはぐくむ音楽的環境については、物的なものと同じ位、もしくはそれ以上に、人的環境がかなり大きく左右すると思っているので、いつも難しいなあと思うことが多いです。子どもは大きな吸収力を持っている為、良くも悪くも日々の保育活動の積み重ねがその子の音楽的感性を育んでいくことを忘れずに保育しなくてはと思っています。歌唱指導1つとっても、こちらの導入、言葉かけ次第で、全く子どもの歌い方、気持ちの入り方が違いますので、教師の力量による部分は大きいと思います。でも、まず、好きになること、興味をもつこと、そこからスタートすると思っているので、私自身がそういう視点で物事を見て、子どもに伝えていきたいなあと思っています。(8年)
保育内容に関して
12) 偏ったジャンルの音楽とばかり触れ合うのではなく、童謡やアニメソング、クラシック、ジャズ、雅楽等、様々な音楽と関わることでできる環境作りが必要であると思います。(4年)
13) 色んな音楽(うたやリトミック etc)に楽しく触れられる時間を沢山保育に取り入れられるように工夫しています。(6年)
14) 楽器に触れる時は、初めから鳴らし方、注意点、等を伝えるのではなく、まず、子ども達の「どんな音だろう?」「どうやって鳴らすだろう?」「ここをたたくと音が出るのかな?」など子どもが考えられるように心掛けている。(4年)
15) 外あそびに出かける時や、友だちのトイレを待つ間の少しの間に歌を歌っています。(7年)
16) 楽器……幼児期だからこそ、できるだけよい音を奏することのできる楽器に触れさせてやりたい。音に深味や響き、聞き心地のよい音色の楽器に出会わせたい。(31年・園長)

17) 身近な音、自然音に耳をかたむけ、興味をもち、遊びに取り入れることが大切だと考えている。その経験こそが、その後、「音を楽しむ」＝「音楽」にもつながるのではないのでしょうか？（10年）
18) 身近にある素材、季節ならではの音などを五感を通して体感する機会をもつ。又、感じたことを身体や音づくり、音さがしなどの遊びを通して表現する機会をもつことで豊かな感性をはぐくむ活動につながっていくと考える。
19) 子どもたちは楽器だけでなく、雨や風、葉っぱの音など「あ！この前と違う」と音から気づくことがたくさんあったり、音にとっても興味を持って楽しんでいます。まずは音っておもしろいと一緒に楽しめるように心がけています。（3年）
子どもの気持ちに即して
20) 強制的ではなく、子ども自らが積極的に楽しんで、音楽と触れ合っていく中でこそ、豊かな感性が育まれていくのだと思います。（4年）
21) 「歌うのって楽しいなあ」と子どもたちが感じてくれば、と期待しています。（7年）
22) 子どもが自発的に音を楽しもうとする気持ちを大切にしたいです。（4年）

※ 表中の箇条書きの内容は、回答の表現のままである。また、（ ）内は経験年数である。

※ 役職者（主任、園長）の回答には役職名を記入した。

※ 下線は筆者による。

u>

ざまな音にふれられる活動（3位：4.59）」、「身の回りのさまざまな音に耳を傾ける活動（4位：4.57）」などが続いていることが読みとれる。これらの4項目の平均値は4.57以上の極めて高い値を示していることが特徴的である。また、最も平均値が低かった「芸術や文化としての音や音楽にふれられる活動（最下位：4.21）」においても、保育者の6位の項目よりも高い得点である。この結果は、学生が音楽的な環境構成の要素として、保育内容を重視していることの現われだといえよう。

(3) 表現力や感性を育む音楽的環境について

表8は、質問4に沿って保育者が子どもの感性をはぐくむための音楽的な環境について考えていることを自由記述した内容をまとめたものである。

記述内容には人的環境としての保育者自身に関するものが多く、中でも保育者の意識について多様な記述がみられた（表8の保育者の意識に関する記述には、筆者が下線を加えた）。

表8からは、「先生の落ち着いた声を聴きながら歌うことを大切にしたい」（表8-3）、「基本的に音楽を大切に、つまり音を楽しむことのできる環境にする必要がある。声、音、曲、そして、静けさまで感じる環境に子どもをおきたい」（表8-7）、「まず、好きになること、興味をもつこと、そこからスタートすると思っているので、私自身がそういう視点で物事を見て、子どもに伝えていきたい」（表8-11）などの

ように、子どもの音楽的な成長を見据えて環境構成を試みている保育者の、さまざまな思いや考えが読みとれた。

また、「教え込む音楽でなく、発見がたくさんできる音楽活動ができる環境を十分に整えていきたい」（表8-4）や、「自然の音をきく時に保育者が『さあ、外を見て自然の音をきいてみよう』と子どもたちに声を掛けるのと、『誰がまだお話ししてるのかなと思ったらセミさんだった！』と子どもたちに声掛けをするのでは同じ自然の音をきいてはいるが子どもたちの受け取り方が変わってきます。保育者側がどう子どもたちに声をかけていくか、いつも意識して保育をしています」（表8-10）のように、子どものさまざまな音への気づきを促すような意識的な配慮や工夫に関する記述もみられた。

その他には、音や音楽に親しみ、楽しさを味わう心情や意欲、態度を育てることを念頭に置き、遊びを通して表現する機会をもつことが豊かな感性を育む活動につながるという記述（表8-18）や、「音楽に限らず、五感を大切にする保育を心掛ける様、まづ先生自身の意識を高めていく必要があると思います」（表8-5）などように、保育者自身の意識向上の必要性についての指摘もみられた。

4. 考察

前章では、保育者への聞きとり調査の結果と学生への調査結果を分析し、比較検討を行った

結果、学生においては「保育における静かな時間の確保」「静かな場の整備」など保育現場の「静けさ」に関わる項目の順位が低く位置づけられ、保育者との間に相違が認められた。

表9 カテゴリー別の平均値比較

項目	保育者の平均	学生の平均
物的・空間的環境	4.14	4.34
人的環境	4.26	4.44
保育内容	4.24	4.48

また、表9からは、学生の評定値が全体的に保育者よりも高い傾向にあることが読みとれる。

さらに、項目別に「物的・空間的環境」「人的環境」「保育内容」の3つのカテゴリーの平均値をみると、保育者では「人的環境」の平均値が最も高く、学生では「保育内容」の平均値が最も高い。この点にも保育者と学生の意識の相違が認められる。以上のことをふまえ、本章では音楽的視点から保育現場の環境構成を捉えるに当たり、「保育の場の静けさに着目すること」と、「人的な音楽環境として保育者自身を意識すること」の必要性を重視し、この2点について考察を深めたい。

(1) 保育の場の静けさに着目すること

保育の場の音環境の多くは、子どもたちが活発に交わす話し声や笑い声、歌声や楽器の音、走り回る足音や遊具の音など、多様な音が響きわたっていることが考えられる。保育現場の音環境を調査した志村は、音圧レベルがかなり高い数値であることを示し⁸⁾、保育室内が快適な音空間になるように、音環境への意識を高めることが必要だと指摘している。

マリー・シェーファーは、「サウンドスケープ [soundscape]」（音の風景）という言葉を用いて音環境に目を向けることを提唱した⁹⁾。彼は「一日のわずかな時間でいいから、みんながおしゃべりをやめて、世界に耳を傾けるように

なったら良いのに、と思うことがある。…うるさい場所では、静かな音や遠くの音は聞こえない。サウンドスケープはいつも大騒ぎだ。オーケストラやバンドの演奏を聞くことは、確かにわくわくする。でも、とても大きな音には気をつけなければ。それらの音は聴覚を傷つけることがあるからだ。そして、一度失った聴覚は二度と取り戻せない。新しい耳は生えてこないのだ。だからこそ、耳の大切さを自覚するべきだ。特に教師は、うるさすぎる環境から子どもたちを遠ざけるように注意する必要がある。」¹⁰⁾と述べ、静かな時間や空間の意味を問いかけている。

また、幼児期の感覚教育を重視したマリア・モンテッソーリは、子どもの聴覚への働きかけとして、「静寂の遊び」と呼ばれるゲームを試みた。それは、様々な音の原点に「静寂（サイレンス）」をとらえ、静けさの中にも音の満ちた新しい世界があることを子ども自身に気づかせる試みであり、静寂が確立した時、子どもはわずかな音も聞き分けて、楽音と対比したり、新しい音を発見するなど、美的鑑識力につながると考えられている¹¹⁾。

こうした静寂の捉えからは、保育の場の静けさに着目することがなぜ必要なのかを考える手がかりが得られる。静かな空間では保育者や友達など周り人の微かな声のニュアンスの違いや、小声で話す言葉や口ずさむ歌を捉えることができる。落ち着いた音環境の中では、細やかに互いの気持ちを交流させてコミュニケーションを深めることや、興味のある遊びに集中して取り組むことが可能となろう。また、保育の場の静けさは、子どもを取り巻く自然音や生活音への気づきや発見を導いたり、物との関わりにおいて生じる素材自体の音や自分自身の動きによって生じる足音や手を打つ音、叩く音、ぶつかる音などの気づきをもたらす。すなわち、それは身の周りの音への感受性を高めることへとつながるのである。

また、動的な遊びや活動の時間・空間の中に静的な時間・空間が入ることによって、保育の流れに静と動、緩と急のリズムが生じる。必ずしも音楽的なリズムばかりとはいえないが、わ

れわれの日常生活は「呼吸のリズム」「歩行のリズム」「生活のリズム」などと呼ばれる知覚的な法則性のあるものと密接な関わりをもっている¹²⁾。そうした生活の場のリズムとして、保育の場に生じるリズムを子どもが身体をとおして感じ取っていることを意識すべきである。

(2) 人的な音楽環境として保育者自身を意識すること

子どもにとって、保育者は幼稚園や保育園という共通の基盤に立つ目上の者であり、園生活において自分たちに気持ちを向けてモデルを示したり、ともに遊んでくれる信頼のおける人物である。そのような保育者が楽しく歌う姿や声、また周囲の音に耳を傾ける様子を子どもは真似ようとする。フランスの人類学者マーセル・モースは、教育の概念と模倣の概念とは重なり合う余地があり、「子どもも大人も、その信頼し、また自分に対して権威を持つ人が成功した行為、また成功するのを目のあたりに見た行為を模倣する」¹³⁾と述べている。生田はこれを「自分と同じ世界にいる目上の者、しかも自らが『善いもの』として同意することでその権威を認める人間が示す行為を模倣することである」として「威光模倣」という言葉を用いている¹⁴⁾。

筆者はこれまでに幼稚園の年長児を対象に歌唱音程の獲得過程における反復聴取の実験を行い、子ども達には声楽家の歌う声よりも担任保育者の声を聴く行為の方が、より積極的な聴取行動を導くという結果を得た¹⁵⁾。音楽的な技術はより高いが親近感の希薄な人物の歌声よりも、身近にいて日々の生活の中で親近感を抱いている人物の歌声の方が、子どもに、より積極的な聴取行動を導くという結果は、非常に興味深いものであった。そこには保育者の行為が子どもによって「善きもの」として捉えられ、モースや生田のいう模倣行為の対象となっていることが窺える。

歌うことも含めたさまざまな保育者の行為は、それが意図的であるかどうかにかかわらず、子どものモデルとなり得るものである。従って、保育者はこうした自身の行為が子どもを取りまく環境の一部となり、子どもに取り込まれることに

対して自覚的・意識的であるべきである。

また、子どもへの配慮だけでなく、保育者自身が周囲の音や声、音楽、美しいものに対して敏感な感性を磨くことや意識的であることが望まれる。子どもにとっては、身近な環境が周りにあるだけで心が動かされるわけではない。環境と関わって遊ぶことをとおして、おもしろいという気持ちや新たな気づきや発見が生じ、心が動くのである。保育者はそのような気づきや発見がもたらされるように、環境を構成し工夫することが求められるが、同時に子どもの気づきや表現を受けとめ、共感することができる感性も必要とされる。以下の記述は、シャボン玉遊びを行った保育者が、自身の感性を磨くことについて自覚的、意識的に記述したものである。「実際にシャボン玉遊びを行ってみると、教師が予想していた以上に幼児が様々なことに気づき、感じ、それを表現していることが分かった。同時に教師自身が、その幼児が感じていること、表現していることを十分に受け止め、共感できなかったのではないかと反省した。教師自身も幼児と共に感性を磨いていくことが大切であると痛感した。」¹⁶⁾。

保育者自身の意識の向上について、公立幼稚園園長である得能は、「豊かな感性を育むには、保育者自身がまず美への追及を日常生活の中で怠ることなく、『おもしろい』『はっと気づく』『驚く』『心地よさを感じる』などの多様な豊富な経験を重ねる機会を意識的にもつ努力を欠かさないことである」と指摘している。子どもが環境をとおして、さまざまな出来事に関わり、心を動かして豊かに感性を磨いていく過程には、保育者のあり方が重要であることが理解できる。保育者がそのことに自覚的であり、自身も音楽環境の一部であるという認識をもって、意識の向上を計ることが必要であるといえる。

「私の意見では、どんな先生もまず自分自身の教育に従事しているので、その活動がおもしろければ、それは周囲にも影響するだろう。私の意見では、先生が成熟しないような教育計画はすべてまちがっている。」¹⁷⁾ というマリー・シェファーの言葉は、保育者自身の意識的な

向上について示唆的である。

5. 今後の課題

本研究では、調査対象人数が少なく、データの偏りが否めない。また自由記述の中に、「27項目の質問について、判断の難しいものがある」との内容が含まれていた。今後は、予備調査を行うなどして、項目の内容や文言を詳細に吟味する必要があると思われる。

しかし、保育者と学生への聞き取り調査の結果を比較することにより、学生にはまだ捉えられていない保育現場での音楽的な環境構成の大切な要素が浮かび上がった。保育者養成に関わっている執筆者らは、保育者を目指す学生が将来保育現場の音楽的な環境を幅広い視点から捉え、その構成を担えるように、また子どもの音楽的な感性の育ちを豊かに援助できるような人材養成に向けて、保育現場とも意見交流を行い、さらなる授業内容の検討、改善を重ね、指導に臨みたい。

謝辞

本研究のためにアンケートにご協力くださいました幼稚園、保育園の先生方に、記して厚く御礼申し上げます。

<註>

- 1) 幼稚園教育要領〈平成20年告示〉フレーベル館 2008 p. 4
- 2) 保育所保育指針〈平成20年告示〉フレーベル館 2008 pp. 4-7
- 3) 小山祥子“保育環境に対する保育者と学生の認識についての一考察”日本保育学会第57回大会発表論文集 2004 pp. 372-373
- 4) 嶋田由美“保育者のピアノ演奏に関する意識調査—リカレント教育構築へ向けての基礎的資料として—”日本保育学会第62回大会発表論文集 2009 p. 353
- 5) ①志村洋子・甲斐正夫“保育室内の音環境を考える(1)”埼玉大学紀要 教育学部 第47巻第1号 1998 pp. 69-77②野口紗生・小西雅・及川靖広“乳幼児の豊かな知性・感性を育む環境づくり～保育・教育施設における“音環

境設計”を通して～”発達研究 第22巻 2008 pp. 235-246

- 6) ①吉永早苗・奥山清子・稲盛義雄“子どもの音環境に関する研究Ⅰ—幼稚園・保育園の室内における望ましい音環境について—”ノートルダム清心女子大学紀要 第28巻第1号 2004 pp. 55-63 ②吉永早苗“子どもの音環境に関する研究Ⅱ—音との感性的な出会いを演出する—”ノートルダム清心女子大学紀要 第32巻第1号 2008 pp. 59-67 ③岡本拡子・新開よしみほか“音環境をいかした保育—「望ましい音環境」のためのチェックリスト試案—”高崎健康福祉大学紀要 第8号 2009 pp. 49-67 ④文部科学省 科学研究費補助金 研究成果報告書『音・声・音楽を中心とした表現教育の構築』(基盤研究(C) 課題番号:19530737, 研究代表者:岡本拡子) 2009
- 7) 前掲書4)の嶋田の研究では、幼稚園園長や保育所所長が年長児担当保育者の音楽的な能力として、鍵盤楽器の演奏技能・歌唱技能を必須のものとして考えていることが明らかにされている。
- 8) 5)の①と同書
- 9) 鳥越けい子『サウンド・スケープ その思想と実践』鹿島出版会 1997
- 10) R. マリー・シェーファー・今田匡彦『音さがしの本』春秋社 2009 pp. ii-iii
- 11) ①マリア・モンテッソーリ著/阿部真美子・白川蓉子訳『モンテッソーリ・メソッド』世界教育学選集 明治図書 1974 pp. 163-172②志村洋子「3. モンテッソーリ」『学校音楽講座2 音楽教育の歴史』音楽之友社 1983 pp. 176-181
- 12) 後藤靖宏「3章 リズム (旋律の時間的側面)」谷口高士 編著『音は心の中で音楽になる—音楽心理学への招待』北王路書房 2000 pp. 53-81
- 13) M・モース著/有地 亨・山口俊夫 共訳『社会学と人類学Ⅱ』弘文堂 1976年 p. 128
- 14) 生田久美子『わざから知る』東京大学出版会 1987 p. 116
- 15) 岡林典子“歌唱音程の形成にみる反復聴取の条件”音楽教育学 第24-2号 1994 pp. 15-24
- 16) “研究のあゆみ”平成20年度 宝塚市立西山幼稚園 p. 12
- 17) 得能公子“幼児期の表現活動に求められる保育者の資質”日本保育学会第62回大会 発表論文集 2009 p. 569
- 18) R. マリー・シェーファー 著/高橋悠治訳『教室の犀』全音楽譜出版社1980 p. 2

保育の場における音楽的環境に関するアンケート

このアンケートは、子どもたちの感性を育むための音楽的環境について考えることを目的としています。ご記入の内容については研究の目的以外に使用することはありません。ご多忙のところ誠に恐縮でございますが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。尚、お手数をおかけ致しますが、ご記入後は8月8日(土)までにご返送くださいますようお願い申し上げます。

京都女子大学短期大学部
岡林典子
丹羽ひとみ
村田睦美

◆ 回答者記入欄

役職	園長 / 主任 / 担任 (歳児) / 臨時職員 (歳児)
性別	男 女
保育経験年数	() 年
記入日	平成 21 年 月 日

1. 子どもたちの豊かな感性を育むために、保育の場における音楽的環境として意識されていることはありますか。

はい いいえ

2. 「はい」と答えられた方は、意識されている事柄を具体的にご記入ください。

3. 子どもたちの感性をはぐくむための音楽的環境として、どのようなことが大切だと思いますか。以下の項目に関して、該当する番号を解答欄にご記入ください。

番号	内容
5	とても大切だと思う
4	大切だと思う
3	どちらでもない
2	大切だとは思わない
1	全く大切だとは思わない

No	【物的・空間的環境】	解答欄
1	さまざまな楽器の整備	
2	さまざまな音を身近で感じられるような楽器・音具コーナーの設置	
3	さまざまな音楽を身近で感じられるようなCDプレーヤーの設置	
4	さまざまな自然音に気づけるような場の整備	
5	生活の中の身近な素材の音に気づけるような場の整備	
6	園における静かな場の整備	
7	保育における静かな時間の確保	
8	異年齢の子どもたちの交流の場の確保	
9	子どもの動きや活動を促すための音楽の活用	

No	【人的環境】	解答欄
10	保育者自身のピアノ演奏技能	
11	保育者自身の歌唱技能	
12	保育者自身の表現力	
13	保育者自身の発する声の大きさや音色	
14	保育者のタイミングのよい言葉かけ	
15	保育者のリズムカルな言葉かけ	
16	さまざまな自然音に気づけるような保育者の働きかけ	
17	生活の中の身近な素材の音に気づけるような保育者の働きかけ	
18	友達や保育者の発する声を感じとれるような保育者の働きかけ	
19	子どもが自分自身の発する声を感じとれるような保育者の働きかけ	

No	【保育内容】	解答欄
20	さまざまな歌を歌う活動	
21	さまざまな楽器であそぶ活動	
22	さまざまな音楽を聴く活動	
23	身近な素材を用いた手作り楽器や音具を作って遊ぶ活動	
24	身の回りのさまざまな音に耳を傾ける活動	
25	自然の中のさまざまな音にふれられる活動	
26	芸術や文化としての音や音楽にふれられる活動	
27	行事（生活発表会、お誕生会、クリスマス会など）における音楽の活用	

4. 子どもの感性をはぐくむ音楽的環境について考えておられることがあれば、自由に書いてください。